

もう20年以上も前の話になる。自分が「YES」と言えば、ナショナルチームの監督になるところだった。

その頃、イタリアにいた。ローマに住んでいた。日本ソフトテニス連盟が、ソフトテニスを世界中に普及させようとしていた。ソフトテニスをオリンピック競技にしたかったのであろう。ヨーロッパへの普及の足がかりとしてイタリアが選ばれた。まずはイタリアからと考えたらしい。

事の経緯は忘れてしまったが、私のところに連絡がきた。数日後、日本ソフトテニス連盟の方が、ローマ日本人学校にやってきた。手土産というわけではないのだが、ラケット4本とボール1ダースをもってきた。これでよろしく願いますということだった。さすがに、ローマには自分のラケットをもってきてはいなかった。イタリアでソフトテニスをやろうとは考えなかった。やれるとも思っていないかった。

しばらくして、ローマ市内のテニスコートに行くことになった。久しぶりである。幸いにも、ローマ日本人学校の同僚の中に経験者がいた。ちょうど前衛だった。私が後衛なのでペアができた。テニスコートにイタリアの女性が現れた。4人である。みんな背が高い。明らかに、こちらを見下している。こんなに小さな日本人の男が、本当にソフトテニスなんてできるの。そう言っているように思えた。確かにこちらは二人とも小さい。

試合をすることになった。女性たちは硬式テニスの経験者だった。どういった経緯かはわからないが、彼女たちがイタリア代表として選ばれたのだろう。ボールを打ってみると、意外と打てる人たちだった。それなりにソフトテニスの練習をしてきているようだった。

試合が始まった。とりあえず形にはなっていた。だが、こちらの敵ではなかった。競り合うほどではない。かといって、圧倒的勝利を収めてしまえば、彼女たちのプライドを傷つけてしまう。国際親善の観点から、ほどほどに手を抜いた。それでも、こちらが勝利した。試合の途中から、彼女たちの表情が変わってきた。こんなはずではないと思っていたのかもしれない。きっと、硬式テニスでは、それなりの人たちなのであろう。

試合が終わると、彼女たちの表情がやわらぎ、こちらを認めているふうだった。ローマ日本人学校教員ペアが、イタリア女子代表に勝った。無事に国際交流は終了した。

数日後、また日本ソフトテニス連盟の方が、ローマ日本人学校にやってきた。今度、東京で国際大会がある。イタリア代表も参加することになった。あなたにイタリア代表の監督をお願いしたいとのことだった。

一瞬、心が揺らいだ。日本に行ける。そう思った。だが、はいわかりましたとはいかない。そもそもイタリアの外に出るのが簡単ではない。日本に行けるのは、身内の不幸などに限られる。許可が下りるわけがない。自分の置かれている立場を説明し、丁重にお断りをした。

後日、東京の国際大会に彼女たちが出場したことを知った。イタリア代表選手の練習相手をしたことになる。これも国際貢献か。思い出とともに残ったのは、いただいた4本のラケットである。これらは、そのまま日本へ帰国となった。今でも我が家にある。思い出の品である。